

文化

エジプト王朝の亜麻を研究

染織の技の歴史  
人の営みに影響



セントラルパークが色づき始めたニューヨーク。梶谷宣子さん(75)は久しぶりにメトロポリタン美術館を訪れていた。在職中から調査していた、紀元前1650年のエジプト王朝の亜麻の布の報告書を書くためだ。

「手織物と考古学の経験があったので、保存修復の方法を探るために、染織技術史を研究するのは楽しい仕事でした」

「良い物があるので見にいきましたよ」と向かったのは、ギリシア・ローマ美術のフロア。紀元前550年頃の小さな黒絵のレキュトス(油壺)に、

女性たちが羊毛の梳き毛から糸を紡ぎ、堅機で織り、仕上がった衣服を畳む様子が描かれている。

「紀元前のギリシャの技法がどのようであったかを語っています。染織の技は人の営みと共にあり、交易や侵略により互いの文化や技術が影響し合っ

て変化してきました」

人々の記憶を留めた染織品を保存修復して、後世に残してゆくために、梶谷さんは力を尽くしてきた。植物の茎や葉の繊維で織られた布はその最も古いもの。王朝時代のエジプトでは亜麻が用いられた。

1935年にメトロポリタン美術館が紀元前17世紀の墓を発掘調査した時、副葬品として白い平織りの亜麻の布が70点出土した。それは平均長さ515cm、幅161cm、重さは約400g。うち2枚は細い糸で織られ、わずかに140グラム。体に数回巻きつけて着ても透けて見えるほどの薄さだった



メトロポリタン美術館を訪れ、発掘された紀元前1650年頃の亜麻の布と再会する梶谷さん

という。

王侯貴族はなんとなまめかしい装いを好んだことか。

「亜麻は染まらないので色模様を織れないんです。だから糸を細く績み(長い繊維をよりあわせてつなぐこと)、薄く織る方向に技術を磨いたのでしょね。当時は白が好まれたと見る美術史家もいるけれど、色の選択ができるのは近代の話です」

梶谷さんは染織品を見る時あらゆることに思いを巡らせる。繊維ができる時、糸が作られる時。どんな天然染料で染め、どのように織られたのか。人がどのように使っていたのか。

「現代の感覚で見ているのでは間違えます。今は色があふれているから、昔もそうだったと思っっているでしょう? 身近な天然の素材を利用していた時代、色は貴重なものでした。自分をその染織品があった時代や地域に置いて考えれば、多くのことが見えてきます。修復はそこから始まるんですよ」

(ライター 赤坂志乃)